

サクラソウ属植物と仮称ウリュウコザクラの分子系統解析による分類

雨竜沼湿原を愛する会

佐々木 純一

ウリュウコザクラの発見記

時は昭和 47 年(1972)の初夏、北海道山草趣味の会の村田氏が友人の住本氏の庭で、見慣れぬ小形のサクラソウを見た。住本氏が暑寒別山系信砂岳の通称大岩壁で発見したと言う。昭和 50 年に旭川大学の豊国秀雄教授に同定を依頼したが、「サクラソウ属のユキワリコザクラに似ているが一致しない」まま、仮称ウリュウコザクラは幻の名花として一部の山草愛好家に栽培されていた。

10 年ほど前にこの花の存在を聞き、毎年 5 月の残雪溪の信砂岳で探すが、高さ 250m、幅 300m 以上の急峻な岩壁に辿り着くだけでも容易でなく、しかし、2015 年 5 月 4 日、同行した新田紀敏氏が岩壁の窪みで開花する 2 個体を採取した。垂直な岩壁と冰雪溪の崩落地で高度な技術を要する危険な岩壁で、奇跡的にウリュウコザクラは 43 年ぶりに開花個体が確認された。

ウリュウコザクラの分子系統解析と結果

植物の分類で花の色や葉の形で識別する形態分類では同定できないウリュウコザクラは、DNA による分子系統解析が必須である。そのため北海道に生育するサクラソウ属の全種を採取して、解析は北海道大学大学院の大原研究室が実施して各種のサクラソウ属を、遺伝子が似ている種をまとめた「分類系統樹」を作成した。サクラソウ属はサクラソウ、クリンソウ、オオサクラソウグループ、ヒダカイワザクラグループ、ユキワリソウグループに大別され、ウリュウコザクラはユキワリソウグループに含まれ、その中でもレブンコザクラと近縁な種と推測された。全道一円で生育するサクラソウ属の分子系統解析は初めての報告で、従来の形態分類による種分けが分子系統解析でも概ね支持されることが確認できた。

サクラソウと親しむために

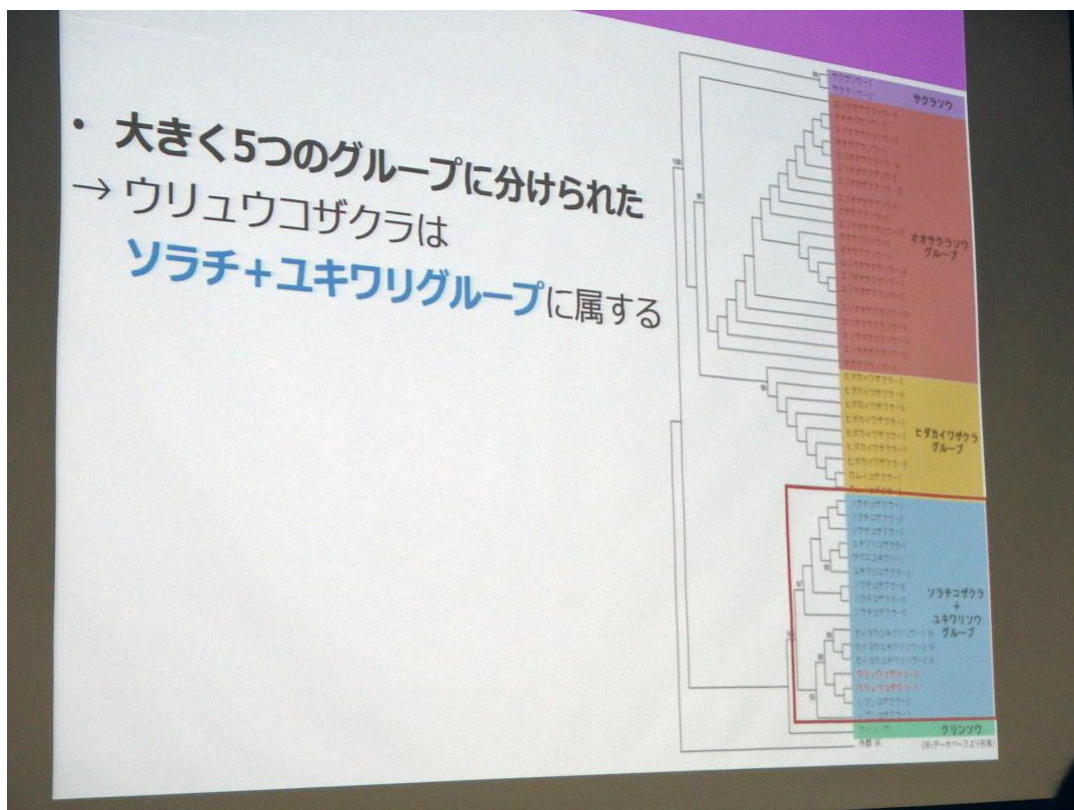
レブンコザクラは名前の由来となった礼文島や芦別岬山、知床半島と道内で局地的に隔離分布する種で、それが暑寒別山系信砂岳で生育する可能性が示唆された。大昔、何万年前かは分からないが、おそらく全道分布していたであろうレブンコザクラが自然の遷移で淘汰され、信砂岳の岩壁で生き延び悠久の年月で代を繋ぎ、今ウリュウコザクラの地域名で受け継がれている。

広く「プリムラ」と愛されるサクラソウ属でも自生種は似た形態が多く、種分け(同定)が難しいが生育地ごとに種が判明した。5 月 2 日に北海道の植物や自然愛好団体が集う「北海道高山植物保護ネット」で報告、今後は雨竜沼湿原を愛する会や北方山草会の仲間が観察会や報告会などで皆さんに伝えることで、「難しいサクラソウ属の見分けが、親しみやすい花」と普及することが期待できる。

ウリュウコザクラは新種で無かったけれど、そして北海道のサクラソウ属の住み分けが明らかになり、前田一步園財団の助成事業のお陰で大きな疑問が解消されたことが意義深く、深く感謝いたします。



プレゼンテーションをする佐々木純一



分子系統解析によるサクラソウ属の系統樹



信砂岳岩壁で自生するウリュウコザクラ(新田紀敏氏撮影)